

編集後記

『社会と倫理』第31号では、現在研究所に所属する第一種研究所員3名それぞれの専門性に基づく3つの特集を企画した。

特集1「幸福論の諸相」では、中国思想、日本思想、西欧思想、宗教思想、政治思想の研究者がそれぞれの研究領域における幸福論について様々なアプローチで取り組んでいる。2000年以降の心理学領域における幸福研究の進展を受け、2012年には、国連による『世界幸福度報告』が刊行された。そのなかで、国民総幸福量を指標とした幸福度ランキングでの日本の順位をめぐって、近年俄かに幸福が注目を集めている。実証的な研究成果に基づき、経済的な効率性のみならず世界の人びと一人ひとりの幸福感を丁寧に配慮して、現在の世界の福祉に関する実態を浮き彫りにしようと試みるこうした一連の潮流は、社会倫理の観点からも評価されるべきものであろう。しかしながら、古来世界中で様々な仕方考えられてきた幸福とは、そうした枠組みでは捉えきれない意味の広がりをもつものであり、そうした広がりもまた、私たちの幸福理解につながるだろう。そうした問題意識のもと、本特集では、意味の広がりを守りつつ思想としての幸福なるものを取り出そうと各論者たちが苦闘している。

特集2「自殺対策をめぐる政策・実践・研究」では、タブー意識が残存するなかで正面から論じられることの少ない自殺の問題について、私たちがいかなる姿勢で臨むべきかを考えるうえで必須となる基本情報が提供されている。1998年の自殺者数の急増以来、その数が14年にわたって高止まりし続けるなか、2006年に自殺対策基本法が成立し、翌年には自殺対策推進室が設置されるなど、行政は目まぐるしく動いていた。その渦中で実際に実務を担った本人が、その当時起こったことについて、記録にとどめるべく論考を執筆している。したがって、本特集に収録された論考は、研究論文というよりもむしろ、行政の自殺対策に関する事実を記した一次資料としての意味合いが強い。さらに、本特集では、自殺の危険性のある人たちにも必要となるこころのケアに関する重要点

が、岩手県で実際に活動を続ける医師によって提示されている。本論考を読み解くことで、数多くの相談者たちと向き合うことで培われてきた実践知に直接触れることができるだろう。

特集3「地域の水を再考する」では、水と地域のつながりを実証的に探ろうと試みる3つの論考が収録されている。20世紀以降の上下水道の整備などにより、私たちは上質な水を自由に利用できるようになったが、それは、水を土地から分離することで水の地域固有性を希薄化させ、水が取引対象となる経済財の一つとして認識されるという結果をもたらした。しかし、水の希少性と代替不可能性を考慮するならば、こうした事態の推移を楽観視するわけにはいかないだろう。本特集は、近代河川行政の成立過程、戦後日本の水資源開発、そして、ダム撤去という相互に関連するテーマを取り扱った実証研究を通じて「水のとらえかた」「川とのかかわりかた」を明らかにすることで、水と地域のつながりの問題を解き明かす糸口を探ろうとしている。本特集は、『社会と倫理』第29号の特集「本質的自然資本（Critical Natural Capital）概念の可能性と課題」で提起された問いに対して、水に着目した実証的な回答を出そうとする試みと位置づけることもできるだろう。

そして、本号には、12本の書評と2本の新刊紹介が収録されている。前号までと同じく、意識の哲学、経済学、自殺問題、倫理学、政治哲学、生存学等の多岐にわたる学術書に対して、それぞれの領域で活躍する一般の研究者から、単なる販売促進目的の書評を超えた本格的な書評を寄せていただいた。とりわけ、品川哲彦氏の著書については、3本の書評が寄せられ、それに対して著者の品川氏自身が応答するという贅沢な内容となっている。日本語で書かれた研究書についての本格的な学術的書評を本誌の柱とするという編集方針を定めてから10年近くが経過するが、毎号充実した書評をお届けできていると自負している。

30号の節目から新たに一步を踏み出した本号だが、今後とも日本における社会倫理研究の水準を向上させる一助を担えれば幸甚である。

奥田太郎